

平成三十一年七月七日(日) 午後一時始
於 石川県立能楽堂

班

(能)

シテ 松田 若子
ワキ 平木 豊男
ワキツレ 北島 公之

間炭 哲男

大鼓 飯嶋六之佐
小鼓 多田 順子

笛 檜垣 勇

後見 渡邊 荀之助
福岡 聡子

地謡

船本 嘉人 佐野 玄宜
酒井 章 藪 俊彦
長野 裕 渡邊 茂人
山崎 健 松本 博

休憩 二十分

氷室

(連吟)

谷 清士
笠間 啓
岩井 嘉樹
寺田 茂

重

(狂言)

喜 住僧 鍋島 憲

重喜 城戸 弦詩

地謡

清水 宗治
荒井 亮吉
中尾 史生

後見 能村 祐丞

(能)

小鍛冶

シテ 広島 克栄

ワキ 殿田 謙吉
白頭 渡貫 多聞
ワキツレ 渡貫 多聞

大鼓 龜井 洋佑
小鼓 河原 清

太鼓 飯森 友春
笛 瀬賀 尚義

間 山田 讓二

後見 渡邊 茂人
福岡 聡子

地謡

高野 秀幸 島村 明宏
山本 貢伸 佐野 由於
中村 清 高橋 右任
田屋 邦夫 佐野 玄宜

終了 午後四時頃

能 班 女 (はんじよ)

美濃の国野上の宿の長者(アイ)が出て、扇好きから班女とあだ名される花子が、扇の交換をした客の吉田の少将を恋慕して仕事を怠るため宿から追放せざるを得なくなつたと告げます。野上の里を追われた花子(前シテ)は近江路を経て都に向かいます(中入)。一方、野上から東国へ下つた少将一行(ワキ・ワキツレ)は、白河の関で折り返して都へ帰る途中、花子の追放を知り、帰京後すぐに糺の森(下賀茂神社)へ参詣します。糺の森には恋を神々に祈る狂女(後シテ)が来ていて心乱れる様子です。その狂いの芸が近頃評判とあって、従者(ワキツレ)は班女の扇のいわれを問うて狂女をその気にさせます。狂女花子は扇を尽くしの佳句を歌い連ね、形見の扇を残した夫への思いと寂しさを訴えます。夫の面影を追いながら優雅に舞う花子に、輿の中から少将が扇を見せよと声を掛け、夕暮れの月を描いた扇と夕顔の花を描いた扇を確かめ合つて、神前の再会が成就します。

狂言 重 喜 (じゅうき)

弟子は七尺離れて師の影を踏まぬもの。そのように重喜がたしなめられたのは、師の住持の髪を剃るとき、剃刀の切れ味を試しながら戻ってきて住持にぶつかつたからです。説教された重喜は不調法をわび、七尺離れて住持の髪を剃るにはどうしたらよいか考えました。その結果が、剃刀のつかを竹の先に接いで七尺五寸とし、及び腰に剃る方法でした。その方法で住持を、頭は前後に逆剃りし、あげくは鼻先を剃り落とす悲惨な目に遭わせます。

能 小 鍛 冶 (こかじ)

一条院の臣下橘道成(ワキツレ)が出て三条にある小鍛冶宗近(ワキ)の家に急ぎます。今夜、帝の霊夢により宗近に剣を打たす宣旨が下されたからです。宗近には名誉の勅命ですが、力量すぐれた相槌打ちを持たないのを案じながら、氏神稲荷明神の神力にすがつて期待に応えようとしています。祈誓する宗近の前に早くも宣旨を知つた不思議な童子(前シテ)が現れ、漢王高祖・隋の煬帝・唐臣鍾馗の剣の威徳、日本武の草薙の剣の靈験を詳しく語ります。それらに劣らぬ名剣を打つと励ました童子は、助力を約束して稻荷山に姿をくらませます(中入)。宗近が注連を張つた壇を調べ、諸神に祈るうちに童男姿の明神の靈狐(後シテ)が現れ鍛冶壇に上がつて、宗近に従つて相槌を打ちます。その響きは天地に聞こえ、やがて打ち終わつて、表には小鍛冶宗近、裏には小狐と銘を刻みます。この剣による泰平を予祝し勅使に捧げた明神は、再び叢雲に飛び乗つて稻荷山に帰ります。

(金沢大学人間社会学域教授 西村 聡)

次月の予定 平成三十一年九月一日(日)午後一時始

(能) 玉 葛 (狂言) 酢 薑 (能) 融